寛永諸家譜

藤原氏癸廿五冊之内五

支流

118

内閣文庫
番號 和 20199
冊數 186 (118)
函號 76 1

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

脇坂

寛永諸家系圖傳

藤原氏　癸巫

支流

脇坂

安明

弁介　江州小谷郡脇坂の荘の人なり

永禄十一年　観音寺合戦の時ゆきさ討死

源勇院と号す　法乃妙心寺の内

浅草文庫

安治

春日　浦上　中務少輔

天文十三年　足利昭氏の花かうの

永禄十二年　明智日向守光秀織田信

長の命をうけて　丹波国黒井の城を

かこむ　黒井　惣兵衛　重正をせむ

ろかさ　安治十六年　みゝ　賀月荒

ほう　氏を　篠どあるとも　ゆ　れ　明智　手に

ほさ黒井の町に　家戸を　切　ゑ

四方　いろて十　文字に　焼をのらしろ

教兵と　戦　れを　きろふを　首をゆろ

鉄　道　勝　拾　でをゆろ

同年　別　小の　城　かして　ろ　めゝ

中　信　秀　吉　つふ　此年　禄　米こゝ

をゝ　ゝ　ゝ

元亀　二年　播磨　脇田　福島　ゝて

ごろ　こ　ぬが　逆　徒を　退治　せんと　信長

教義為を率して八月廿日小教院と
廿九日摩田播磨をこみせ海面
又大坂の門徒党徒をころして一揆を
企て信長と相こうし秀吉ハその
出迎に国小松郷浅井備前も敗ら
小谷の城のもとへ横山の城有
逗留しまふかころ播州の一揆
蜂起をとさして別ち淡地を発せ
多へ廻りいそぎ京都へのぼりと

まふとき小姓年十ろさるのを信長
演て殺し羽柴筑前守秀吉ハ
安治これをこき十七条なち此度の
所供かつてつまられざる事を感
て たりひ慶長乃作沼せんと思ふ
ゆころよ出りて秀吉ハ渋脇糸を
長演ものとぐに大坂へまいりと変て
元そこに出びてその紅有のち苔を
づさかれ苔をけを船を彩

ぜも三ぞくて三日大津より船を
漕出さる安治永ゝもとをあづち松ば
の亀小路通へ作て秀吉御
馬をまち川秀吉を見る上ゝ安治を見
さまひていの船いさどゝ命を
そむさゝれさる事曲事とゝ
まふ所ゝ三れども若輩所ゝの
ゝろざしある事を感じゝまふとて
そは来を傷ゝ

まゝ船ゝ長濱ゝかつをぶしと所ゝ
安治かゝこまゝとて乗まゝ大津を
志のひいでゝ京都へとぼゝ之源
氏橋乃亀ゝ来をわゝ又道通よ
作て秀吉をまち川秀吉馬上ゝ
安治を見ゝ面ひ命をもひゝく
かゝ称てこれまで来ぬ事いゝを
事ゝと人ども御さゝゝ所ゝを
感じゝまひてそれゝと秀吉御家

若のうをかくごう庵後しけり
秀吉九月十四日に摂州池田
さまふかく出ゆくこころよ越前の国朝倉
左兵衛義景 江州浅井が勢を後
し大津を通過さうえ入れば
信長摂州福島をひきさらせ京ち
江州うちをしひきまふ秀吉もおもむく
江州かかてうこまふゆくさ安治うちにて
併しけりと秀吉高槻の城みて見
たまひ伊丹なりびに馬具三百とを
二人をとはらまさ江州よりとびゆく
安治れうちとびめく播馬の武者
と動ら
天正四年 信長江の国安土山
城を築きまふとさ丹羽五郎左衛門
長秀に命じて正月十七日に安土
山にいらう 浅国おもむく安土に
とりしさ四月五日より市を

旧月にあでいそぎけるとき安治
秀吉より使として僕一人ゆかせ
せられけるが長秀が命ゆ秀吉より
ある大工を人員あまたあまた荷をとを
ゆくをたづねたいづくゆかれる
ゆて押へとどめ刀ぬきて縄を切ぬを
おとしけるとき彼の命ゆ再り
人員あまたうちてかりをけるとをひ
ちらし彼を人質ありとくしら

秀吉これをきくとひかれ菅沼
こざらひざらひたこと事也事な
ゆて安治を折檻とべしあ
ゆしとき長秀かりて秀吉
宅りさうして安治が忠節を称し
稱めることうあるまうち安治をゆう
され剃をれ忠節ゆうをて
百五十人の地を給
四六年摂津国乃別所小三郎長治

三木の城にうつりて
長の命をうけて大軍を率し
播磨を攻こまふとき合の山道にて
うちたる播磨の役人あり
毋衣あり秀吉これ毋衣を捕士り
志のうへにてみわたすに
べきとのたまふこゝにみなもゝ安治
ゝゝ作毋衣をばけゞとまゝきて
ゆうけをしたるこゝを白それ毋衣を

ゆけ三木の城下あゝ神をあ花首
をとる秀吉感じたまひて向播
播磨を海が家の役人をば
ちまふこれ如もあゝ濱
白き播磨を服坂が役ともこのとき
回回神吉の城を神吉民部別所と
ゆをあらせ三木へかゝりけるば秀
吉まゝ神吉の城を
せめたまふ安治大手にまゝ攻

せ今時城下みて秋地みく軍
をうれしうどこちけく眼をを
地下例をあ宮野伯耆（ねす国傳）と号
安治を刻さくそたくけくちそ帰
と安治出さあごうてこれ祝
ものくちのそうん事いとに切
うべくして志だくあ悪やあ
て一書有大のにうを家いる
伯耆命を安治はさけさくけち

これをうめく多勝一度押破
絶りをれ城をを貴蔵くく
同十一年冬秀吉と柴田勝家
勝家と江別志津岳柳瀬表みく
合戦のとき安治をみく一書を
とあいと秀吉感状をまみを詞
みいく
今秀吉七度後係数法列大秋
そこ拙陣に柴田勝家を

柳沼表ゟ為ニ参ニ及一戦
一清水地向ゟ之ん無御分
子無分ニ而秀吉船前合一番乗其
働ニ付而ハ為ニ廉ニ之ん宛
外ニ手ハ向ニ付ハ伝ニ動ニ
仍而如件

天正十一
六月廿日　秀吉判
脇坂甚四郎

元ふもとの山城の国下津屋と大井ゟ
以下和ゟ食録之ん宛と此
ゟ七人の侍を七本槍と称ス
同十二年信長ゟ二男信雄
乃家長勝川之命ニ而家臣利
ゟ子と秀吉人領有ゟ安治有
あつ者ゟ信雄と秀吉と兵
をたこそゟ勝川ゟ安治をさ
人領をとゟかんとゟいたゟて

織川ゑの母高倉大事なり討死
せさせしきといつたち所時に城をふ
安治ちらとと聞ちと走ぶして
新ゑ乃うれへを構わさに城を
ゆらをせさ織川文ともに伊賀
國有ぐ迄行上野の城を攻ごろ
秀吉織川が浮賀かゆくとこさ招ひ
く安治み織川が人質を尋ふ書
人質をやられ乃

まふかれ秀吉大有いらさまふ
安治驚憤のまま伊賀をもしき織
川文ゑがこりゑと上野の城を
攻く討死とふとさ秀吉泳
いさどわく田小分みて織川文ゑ
をせめ捕ゑ一味て
係報ゑて為ざあるを聞ちれ
のこまふとき安治なるぶを乱が
自天に厚迄とけとれ報逆の織川ゑ

みをゝさまりあるゝとして母を人質
にとりおゝしゝ白須賀城を攻て釜屋
を伊賀守に國小井入初てうつり
國の兵をゝかゝれゝく秀吉使めく
瀧川又ゝを討とる形ら味方を結
軍忠わるゝもゝ中仙を出馬
させ城中に人質をもとゝめゝと
いゝて國侍を一味せさせ敵中より
しのびゝく上野の條をゝこゝ見て敵
有せめおとゝゝ城をとる瀧川又ゝ
を伊賀の國に逐電を此孫秀吉
へ注進しけれゝ秀吉親長
さまひとゝめに山岳兵部を使
ゝゝ戦功を労しゝ播磨守射
長盛を使として國の事申聞り
そゝしゝ紀州安治書をとゝせゝく
國の掟ゝ為ゝ注進しけゝ秀
吉國書をゝくまゝ

書時々被凡仍之国々賞賛
地後去九七日出羽ノ仙北
城々破却々々城ヲモ無之相
究仙北此表後年ノ際まで
押潜ヲ被而ハ敵大別田以下
中村村城ハ之ケ所ヤ其之日
内ニ西馬ヶ目迄来有之日ハ之ヲ国
為ニ過ニ之越ハ太閤破却々々
被しお所ら々之ヲ那ハ若新

道ニ之ヲ分城ハ何篇ニ城為
ニ過ニ之越し ニ内々ニ意作
此方ヘ越ヲ世間ハ行迷ヲ
ニ実作也

十月九八日　秀吉朱印

書状ハ被凡仍之国々向ニ人
賞九お所ニも未塚破却々
彼不仕事ニ也ハ此表取出

性丈夫ニ中分若御出来候
条々ニ付中ニ申聞し条也ニ付而、
内々相お越御
意入意ニ付而也

十一月ニ付　秀吉年寄
服部長門守

安治ニ付伊賀の国を治ル年寄
を以ち国中乃さし出書を えらび
ちさき被相とあるべきあ

ものを成敗をくるべ仕置法度を定
申れば むしろ ちさ ハさち伊賀の
国を ちを治ル国を治ル下知有ち
かゞ れ ル

同十三年ニ月安治を伊賀の国ち
拘ル国 組 郡 郡有うたされる事也
を万石を 同七月秀吉関白ち
任ぐ ちかさ 安治 伊賀 治下ち 叙し
中納言 補有 任ぐ 八月ニ組 ち

大和の国高取の城をうつて二万石を
給ふ　十月淡路国をひらく三万石を
給はりて淡路の城をうける
同十四年　薩摩列大守淡路殿地更
義久を九州へ秀吉公命
ありて九月二日より
仙石権兵衛秀久　ねうの越前守
国をうばはれたりとて中務大輔
義久の倉井淡路
殿を大将として出陣
国境より陣をとる仙石権兵衛秀久
長曾我部信親　服部中務大輔安治
加藤左馬助　赤松則房　同四国の住人大友
義統の勢をもつて淡路家久とたゝかふ
長曾我部を討死し仙石を敗軍し
大友も負あるのども修理亮討たれ
けり　安治高麗へわたりてあひ
たゝかふ此事大坂ふさこえ十二月
廿二日に秀吉より中務大輔をとゝまる

去十五日ゟ高槻城ハ大坂様ゟ御請
被遣候ハ、ゟ高槻の城取巻ハ
義統ゟ被遣候ハ、この せ事こわ
ら取ゟ申ハ及ハ
ゟ我様ゟ内ハ補 何方こ有ハ
小こさ申ハ
国へ被遣小寺方ゟ来ゟ使者
聴候ハ、何ハ
ゟ藤ゟ申ハ
申ハ一ゟ こて御 御動
世間ハ月ハ越ゟ出取ゟ申事
御此方ハ人ハ
十二月廿二日 秀吉朱印
服部中務ハ補ゟ
ゟ入ゟ 注進ゟ
同十五年 ハいゟ
ゟ秀吉九州へ 発向ハ
べゟ 御 ゟ

安治日向国飫肥城へ兵粮をこひ
の名二月二日大坂へ注進ス秀吉
感ぜしめ給ひて返簡をとさまる
去二日より毛利水軍今日十四列来攻
毛利元就今海路を出船し
別所杵へ兵粮弾薬を神吹作
を面々動解申ス事ニ下
敵兵悉く毛利水軍出馬ス
給事当一ケ月下ル事

二月十四日　秀吉朱印

服部中務補ヲ
同三月朔日ハ秀吉大坂を発向して
九列かいより四月朔日ハ巖石の城を
せめまふとき安治一方を案内ス
日ハ高城をせめ薩列三城郭平作
の塚をせめ安治九鬼大隅守嘉隆
か船を馬ノ赤間先手として塚下の
川まで船ヲ押ケ城をかこん

相模せめうせ安治城の城主を
為ん とゝろ ゆゝさ 城を攻山城ゝ忠昭
人質をいざさんとゝ和をこふ よりて
て安治人質をとりて こゝ陣をひき
ゆゝうえもと 敗ヶ原の陣跡を攻落
備後義久降参 九列所くの城を
秀吉有 備後 本領を安堵 四方
太平を唱ふ 秀吉薩摩 子代川の意
太平なる陣をとゝ ひて 依勝に

投持方下約運送のこゝ子代川より
船橋をかけさせふとき 安治九晃
大隅守か 敗 大馬 ゆ 紀
同十八年 小隈 大 京 氏政子 忠氏
秀吉有 ちこ さ たゝ て 相列
小田原 敗向せらる 安治九晃大隅
赤隆か 敗 大馬 ゆ 赤明 長雲 我 紀元親
等を船 大 大将 て 二月中旬
我先 海上 ゆ ゝ 安治同

廿八日遠州今切より兵船にて秀吉へ
書を献じて伯進これを感悦
なるよし申しそして四箱をまふ

廿九日三十遠州今切漂着
岸に伯進切腹の日岩次郎
志水へ二人茶屋の者ども介錯
仕る人衆を越後
を先手に兵船
に伯の新助明日朝ら
生捕馬し乗物に移し次道 遠こ

伯進結出仕
山中橋内にて
二月晦日 秀吉 紀伊
服部中務が補
大義大補

同廿七日 猪列 清水
兵船を伊豆
大国下田城海辺なれば先此城を
せんとて諸将をの〳〵陣宿安
廿九日 山を秀吉伯を氏
歌七〳〵まひて又書をとまふ

三月九日 江州進発 四日 柏原
枝尺九七日 [illegible] 水原 [illegible]
[illegible] 石原 [illegible] 沖 [illegible] 切 越
[illegible] 盛 [illegible] 九 [illegible] 侯 [illegible] 迄
神平 舟 [illegible] 七 [illegible] 計 [illegible] 風 [illegible] 流
[illegible] 越 [illegible] 八 [illegible] 大 [illegible]
[illegible] 城 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]
[illegible] 大 [illegible] 山中 [illegible] 迄

三月四日

秀吉 朱印

[illegible] 中 [illegible] 備 [illegible]
[illegible] 船 [illegible] 家 [illegible] 別
[illegible] 七八町 [illegible] 東南
小山の [illegible] 船 [illegible] 船 [illegible]
あ [illegible] 下田 [illegible] 町 [illegible] 放火 [illegible] 塚
[illegible] 八 [illegible] 戸 [illegible]
攻 [illegible] 秀吉 三月九日 小山中の城
せめ [illegible] 四月二日 小田原の塚 [illegible]
せめ [illegible] 下田 [illegible] [illegible]

服部九兵衛之人を小田原へ召れ
ゝ松山に附城をうまへ長雲我米を
下田のをさへ之人を船に
乗海上より小田原へ通る城の南の
濱を平川口をふさめ安治塚の矢倉へ
大筒をうち入せめ下田の城を
降参しけるさ秀吉安治を
つゝて下田の城をうけとりかゝて
小原方の関東数ケ所の城落ち

小田原の城を七月七日に没落ゝ
ゝ秀吉此うへ人ゝ苦ゝ所ゝ
まで味方の法華宗悉く
にゝ安治所桐東市正重盛を
約束して法華仕置を沈ひら
文禄元年秀吉朝鮮国を征伐し
さまふとき伊藤中納言宇喜多秀家
を大将として陸乃大将を小西
摂津守加藤を計沢黒田甲斐守

船手の大将を安治九郎大隅かゝ
なり四月十二日肥前乃国名護屋
をのく船を出しけるゝ同月
末方を谷山浦小西船を先として
ちゝめく陸を陸の合戦船ハ船いくさ
ふて数十艘の城を押ゆ伊勢湖郡
を押入けり伊藤中納を郡方を陣して
秀吉渡海のゝ城郭を攻
安治を谷山浦に陣を東をつゝ

地をを十三日に郡方を出かゝて日本
乃伊勢湖より郡へ渡来て道ゝて敵
あまたうち出ゝ味方二百
三百を討捕ゝれば船手の大将をく
お候して都をみるまでの道路
五里七里に間方伊の陣をぞ陣
ゝ安治も家長腸切を東海道七郡
ゝ歩卒三百人を添て丹中自
小船ゝを七里に山陸ゝ伊の要害を攻

ちうところあ六月廿日の暁より敵数
百人ばかり要害を取こみたりせい
あれぞ城中小勢にてかるいでく
乃くらいそぎ此名都へ注進し
ちう安治ところをもしもわちあと都す
あるしを鉢ばちふて初茅の財方
ちう井色ひう郡ちあ也要害まで
ひづふ七里なれども間有大河
ありて船みくひうれどとく也

ちつくひり時刻うたりてあう卯の刻
より地名敵兵数百こぐらさ山有
陣をちくひくちう安治敵のあいだ
十七八町あいだ乃ところ山陰より旗を
ちいづ家人山岳太迫を先駆て
て一隊うちみをいづくれい敵陣
色を見て案内相遣しとこし
いろめきてそ乃くく城中より也
安治が旗を見てしろこびみいく

内外の味方一せいに鬨をあげ時を
一回に敵陣かけ〳〵入敵兵こらへ
ぶ〻して後の山にひきたちぞく
とみるゝ所に安治敵の体取
さるる山〳〵に旗あげ幣を打たれば迎場
我先かと旗あげ四方八面に加け
廻られ敵即時に
敗軍を岩山後かに追つめ〳〵或を
きりてはつるもあると或を生捕に

生捕をあらせ時の間か数万の敵陣を
討級かゝて生捕の二百人あまり
首数一千余ありけり山中に掛置ける
あらかじめ日本より相模国藤堂
三河国沙使して後海にたゝが
此合戦の翌日安治が要害へ
戦場に掛置ける首数なるべ
生捕の者を見るに大なる感じける
これ所にて一日逗留して人数

たをしく安治をいおかしてゝ船ゝ
それこゝろ又唐船表へ番船ゝ
のゝ都へこさこうんれば腸切九郎
かゝ蔭三人を番船押へのこめうとて
いそこさ熊川小地ゝ切りたのゝ
しさ中をたゝて日本ゝ治をしられど
秀吉大こさゝ感じて回筒とさまゝ

去七日十九日治進州七日サ三
回刻刻来ら家投人ゝ船ゝこも

がいに番船為警固和越しゆ知ゝ
九郎加蔭安三人和徒母越度板
ゝ紛平壌ニ討果ゝ去又日
ゝ方陣取へ一揆数万人取
ゝ悪切崩数多討捕ゝ首并
生捕ゝ去掛ゝ悪ゝ名ら受ゝ
刻所相見脇ゝ蔭三河書州
回前へ逃ゝ移骨ゝ
儀爲細ゝ回治ゝ大名所ゝ

播田方面より合戦に成り
山中橋内まで下り申候

六月廿二日　秀吉朱印

脇坂中務備前へ

脇坂九郎か為に人数を十四日に合海
の川に乗り出し焙烙火矢の事
船討捕べき評定しけるが九郎
か為に船ごとに成り安治
も勢ぶりあり七月十五日唐浦表

へ船を押出しけるに敵戸内に書
夜に漕かくるを見て鉄炮を
うちかけ射ければいとゝ
書船とうぢ寄せきけるを
戸もなく攻て三里ばかり追ゆくが
為船せだき敵戸内を過て唐さ西へ
いぐ一度に櫂をかちなる大
船を異の如く味方船を引
包みけつめし射かけほどと

味方の船の中小手負死人等うち
歌を大船味方を小船なればかの船
ばかりにて見えて なかの浦戸口へ引き
ぞかんとせしときに歌の者船をも
けるに味方の船へかりうつる矢を
なげられて即討死 舟をやきけり向安治
が家臣脇坂甚兵衛 浅倉七右衛門を初
めて名あるものどもあまた討死し
うちとられども安治を櫓数のかぎり
をやぬ船に乗せ引舟にし
てそれ程悪なりといへども櫓より矢
をあらしてあやうき事十死一
生にさきの歌船いるくき
はひにて大矢を射うけ
られぬを安治が早船をたのみ合海小
引とりぬ討ちとられ手負二百
餘人を陸地より五十町ばかり漕
ぎ小鴻に船をけるをの

舟をあらけうとき番船迎来て
味方の大船をやきうち黒鴻たる兄と
いひしものはそれ日の船長うしが
此船をやの形うを幸さ気ばう
しをうてをせんなるまてひ軍中
ふく諸士ありあうをくし元繁なる間
屋しそて脇切ふく死しうち此とさ
九鬼か数多人を安治をて有唐鴻の
船軍より好まけりうとさて池むら

けうが歌俗多の大船ふれば乱れ
そて二人ともう安宵浦一引ねば
番舟ををひゆさて日嘗間まく
多宵浦の漆ふく船軍うち
にくしまく味方うちまけ九鬼が舟
の忙相ををうちはうち義て入く
番船を唐鴻へうちうをかくて
唐鴻浦の小鴻うはがうし中將が
家人焼拾うし船板を浅有作ち

陸地へわたらんとて番船十艘ばかり
ゆ書義は為をはらまきを結ひ初て
十三日の間松のみどり海藻を食し
て番船乃引ちがひ漕をうかがひ
はこころ又唐船書へ日本兵船俗
多むふとさてて番船俗ゑ引退
ゑ陸ゑ投為し或ゑ人十人て
幾ゑのゑ陸地へわたりけゑを番船
海ゑてかへ海ゑ十人ばかり

射殺しけゑ残るものゑ二百人ばかり
やうやく虎口をのがれかへき命ゑ
かろく合海へ出ゑ此事日本ま
きこえあれは秀吉ゑ為ゑ使ゑ
ゑ虎ねゑ和泉やと
しまふ

ゑ七日かいさんにへ和船作ゑ
敵船招向ゑ大船ゑ焼失ゑ
ゑ兵船ゑ拾神ゑ合動ゑ

芸州へ仕合ト侍ニ成り毋ニ成
候ハヽ如何ハ紀州からいさんる
城を拵九鬼大隅守か為ニ有る物
ゑ三人中候ハヽ固ニ番ニ仕
太ハヽ通為ニ作為ニ為ニ作為ニ
ら拵をハ仕番船ニ乗ハヽ為ニ為ニ
自地績人数を今迄為ニ紀州
彼雑賀相人数ニ外紀州ハ
ハ為ニ拵をハヽ為ニ作をハヽ

候ハヽ委曲為ニ作為ニ為ニ作仕合ト

七月十四日　秀吉朱印

脇坂中務少輔ヽ

かヽて安治唐浦表ニ出て番船ニ
うちまけ士卒作多討せける事を
遂恨ハ忘ひて番船と今一戦せん
如ハ何ハヽこなすを仏ハけらかひ成ども
番船ハ乗ハ約あてさらけ乃ハ出き歟
兵物見の船を見付即討ハ可ハらと

ことゝを拵切し大将とみえしを
生捕にし獄よりて是なりがかど
をて敵陣へ逃そうゝ拵り唐船表
番船軍ハ中さか八百乃大将と成て
来りしと船ちをれとをやうをく
蕃ゆれを熊川へ引ちゝ
同二年正月より脇坂九郎か番熊川
を陣せし番か番船百隻漕入ゝ
毎日みるとのうちへ押込矢を射げ

石火矢をうち入ぼてきけぼ漆の
内りにをさ是ゝ日本乃大船小を
大筒を仕懸陸りをまを鉄炮塚を
つさゝ番船押入とを船陸をに
鳴雷ごとくゝうゝけをを
これ小しひろむ事迄もなくゝきゝ
けをばいゝして此番船を討捕へを
をゝ相渡しけるを敵を莫大の番船
ふゝ懸引自由なゝ称を面くゝ早

船に長縄を入く番船をとられぬ
ゆめ〳〵ゆだんと相定てまちくら
ゐ二月ハ一日ハ番船まもるみをも
うちへ案入ぬをのく早船にのら
ゐ我ぢさかふと番船を押ゆけふ
安治が早舟一番よ押かけ番船よ縄を
とけ案捕ゐ九鬼が早船
よりとをまさそ船に縄をとけをく
番船にのらゐ前後をあらそひ

余後まちくなるもしとき安治いらて
縄をひけ九鬼が船の縄をきち
られを一しと下知しけ安治が
家人之宅庵の郎ハ松ヶ世と色
て九鬼が縄を切られ絶ること船を
のりおもうあいぐ九鬼と脇坂と流
四士軍にをとんとくれども敵
味方の船に押ゆてらまてそこ

ふくる事ならはけりそれあいさ有
敵船庭より矢を射あげ候へば安宅
従兵熊谷惣介と云ものを射矢
あらて死を外痛をかうむる者を
はかりそれはさかゆを一艘ならぬ
投て九鬼脇坂こうひて前後をわ
きひ双方日本へ沿進しけり安宅を
家臣脇坂党兵衛を使者にして
ほ面びらうに云上に横目弓川弓馬助

よりとし脇坂一書にはけりとうよりを若
うと秀吉安宅へ回章をくまふ
五月廿三日くに主水家細川加投
見人仍敵書船を細川有
く漆口押入くに如二艘宗捕内
を艘ニを方兵前、切紅毛完
粉骨神妙ふ泉水池沼で
相励事専一に遠海情を入
戸越しうら脱忘し和泉国

作事仕

三月廿八日　秀吉朱印

脇坂中務殿へ

堅ゝ申付候安治赤隆赤明水軍之為丹
相戦ふ様ふかゝ武者一艘あ
るひは二艘のうち此方ゝ
書船やうの遠ざかる此事
日本へ注ゝえ申候ば秀吉より
安治丹書をとらまふ

一　朝鮮ゝ作事仕
来る六月海一揆京書船
已下相切ゝ仕対馬平均ゝ
ゝ男ゝ成御船数船丸無しに
陸地へ取上ゝ指動ゝ二丹ゝ糸
城郭国ゝ相下丹ゝ元前書
船京捕ゝ成ゝ相ゝ乃ゝ来ゝ
私ゝ丸事も之用ゝ丹前
越度ゝ人ゝ成ゝ海ゝ事

一 ことゝいに陸ニ回船分捕之事

船ゟ船ニ乗移り相手ニ取詰

溝戸口ニかゝる時ハ

体ニ投掛方ニ下沙ニ粮米進

ニ乗越ニ此度船ニ乗越ハ

自然ニ附こ言葉をわけ

ゟ下ニ見物ニ出ハ弓矢八幡

不可成ニ事

一 鉄砲大小別分回船ゟ出ス

取置ニ此茶屋ゟ後手前拂庵仕

之了簡附て乗出ス時ハ

置事

一 兵粮蓄ル要害ニ蓄積入精拵

所要作事

一 自船ニ郡迄ハこの城こまま

相拘置ニ自由ニ有之様ニ

送ル元ニ儀ニ仲沙切ニ沼進

結入ニ為給米ニ地見ル命

二ヶ月也

十一月十日　秀吉朱印

脇坂中務少輔殿

彼地へ天くり附分幸ひ案内思食
小袖二ヶ下ト將又朝鮮根ゑ有
極ゑ進ゑ分てら作出仕置
ふ首尾根ゑ成ト向後ハ吉兵ゑ有
姿ゑ上所要ト將安人可申ト也
ゑ年の義ゑ秀吉ト命ハ申ハ

朝鮮船ゑ浦ゑ乃ちゑでゑ塩屋国ハ
あひ国へ水路の諸將安骨浦ハ要害
とかまへ和船ゑ立番ゑ
まゑ有まゑて脇坂九郎か兵三人国を
ゆゑけゑ安治一番国ゑ乃ち安骨
浦ゑ国ゑ越年ゑ
秀吉日本ハ一ヶ所ゑ
玄二月九郎大隅守ゑ乃ちゑ
安骨浦ゑ来ゑれば安治ハ日ゑ

かゝりける

同日年安治ゝひ渡海してまゝ
安貴浦を渡るゝ朝鮮國中海陸共
ありやう風く治ゝ味方の陣中物騒
にて或ゝ樂をもよおしく
興ゝ時をわすれ或ゝ躍をかけて
さゝもむすび切もわゝ菓乃湯酒高
乃わそびみく光陰ををくられ
それゝゝをほどなく暮ぬ

慶長元年の春安治まゝ日本にかゝり
同二年四月のゝ秀吉ゝゝび
朝鮮國を征しまふ安治まゝ渡海
ゝゝ時日本の兵船も數多被ゝ
射馬ゝゝ答山浦へ入ゝとせて
欲の書船數百被ゝ唐湾表ゝ
答山浦へ押むゝひ日本船渡海を
ゝゝ招んゝゝとゝゝ折ゝ
大風俄ゝ吹来海上波あゝく

れば書船を本の唐土湊より引
ちぐさ日本の舟をちらくまなりて
つゝ角く答山浦より出ゆ
安治を兼ぬ乃ころ答山浦より船
をこれをこゝろ志ちらく逗留
て九月か廿日より来唐
をゝく侯しゝゝ唐土表の書船
はゝくゝきさせ給ひ日本乃兵船
海の磯とし船をもて鎗を一
て相くゝゝ無川湊より出ゆくく
大船を作り唐土表へ押いかの
書舟をうちゝゝ諸将をのく大船
に無川へ乃ゝ諸将をのく大船
をそはゝ無川より唐土表へ
うのあひ八九里角ゝ出ゝ相唐
土乃みをを書船の船をよき所にて
鉦引自由なれぐゝやゝく討ゝ
へきところあゝど日本の大船を名

一番そろへ大敵螺と相図に
いづくまでも追ひ追ひの捕ひ
抜剣しこれをかつを越度
そうろうてとかうおさめて
七日の夜に熊川漆ちのく
船を押いで唐渡へをもむき
なりかとうろうて安治丸
高虎かあたれ馬助赤助二人早船
なりの者抜剣して堺戸のうちに

て夜中高虎書船一艘ぬけ捕なり
安治が知見の早船こきもどりて
いひなりは書船数百艘堺戸四の山陰
なる沖なる浦なりつてこさくなりこれ
高虎早船なり取来堺戸乃うちへ
一艘ぬけとられとひけきは安治丸
なりく大船にをそかりつてとて
早船なりてなりて櫓をとりやめ地へ入れば
夜明ごろかあたれ赤助が早船きを

なるべき堺戸の内より浮びうかび候
の番船の中へ安治と赤明と兼松を
あらそひ押かけ二人とも有り合
捕かけ是をもつて諸手乃大船
小船をもつて番船有り合
敗軍し沖をさして逃
を流れのまゝとなりけ
此日の軍に安治が一手の人馬疲労
布施雅人大野次郎三宅庄助水野
か大勢あるひき沖へ
堺戸にくみかけ
なることあり高虎赤降赤明が兵船
数あまたかけ
信進と秀吉解
此とき陸の大将小西摂津守長崎
福原太馬助

軍ヲ安治ヶ浦ニ動ケ出シ候ヘハ
河内進しけるあひだ秀吉より安治ヶ
浦ニ船をとゝまる
五月十日ニ書状を細川兵部大輔殿
を囲かゝ浦ヶ浦ニ敵船数
百艘有ヲ而、指向数刻ニ戦
敵方船多進ニ而ハ
方人数しゐ打ニ而ハ
打ヲ取ル下知仕ル写ニ

八月十日　秀吉朱印

脇坂中務少輔殿

此時
東照大権現ヲ
て安治ヶ浦ニ
今度ハ
ヲ誠ニ
我ハ大
上ハ

八月十五日　家康御判

脇坂中務少輔殿

相模守元日来れ若き者共入れ申
若き侍衆を御乃至要に
高山大明寺を以て解圍の急節を教へ
漢南の勢五十万騎にて越谷
河門と云ふ所城郭をとり囲へ城
をはり焼をうけ二三万騎だうと
籠り居たり徳川中納言秀忠城を

せられて水路乃徳将を率て九月
十五日小をの河門の浦につきぬ
城乃東に徳川中納言秀忠南を
安治茂を作波多る庭面を九月大陽
赤隆系鳴兄弟小かなたる物赤物貴
平大蔵射ちこけ十五日に来て
いろいろ仕寄をつけ鉄砲石
火矢にて遠攻めに来明れば雨
ちやうべきと相定ぬ

玉薬は用明天皇白雪のごとく
安治と云る虎ひそかに薬しけるは
黄泉の利は欲乃ごとく強くして毒
勢を押借なるを多間をいろべて
ケ育のうちに茶一とて城乃
櫓へ大筒を二ちつうち入をいさぎ
り茶一間をあげ蝋を越て垣乃
根ふ見ぬまは城中より大勢を
面のごとく井ろく多質死人を多

かりさ志ろを垣ろくして漆膠
ふく礫乃ごとくめりたるやすく
茶べきやう利安治云虎やうて
少ひとをひさせ三をあくそひ
のりけまは此の勢も我先かと
茶入くにぬり二九まで四いろろ
城中より見もにたるあせざうひれ
ぶを味方乃勢はうもさのうはと
して多勢て中ろ入あるひは

組うちし或を追つめて首をとる
ほとゝぎす我らを見をはつて之方へ
諸勢一同に鬨をつくりけるぞ其夜
敵二人はら討捕ぬ安治首級を高原
を得らるゝ敵こゝとく敗軍して
東に落行ける翌日早天より一日
夜追ひて山をこす里をはつて追
詰〳〵拵切ゐ十日あまりの
あけぐれに敵のうち敵数百討

捕れば首をそゝぎて尊を
切〳〵首数をかゝへ此ときに安治
首数二千餘切とゝめ敵船乃
依将いづれも南海へかゝる十一月
中旬より要害をこしらへ
か蔭肥後守清正蔚山に要害へ漢南
人数百とゝ進せ十二月六日
小泊進と船手の大将こと〳〵蔚山
の後巻をして地むひらるに十七日寅

風をげしく吹雪さらに降れ
ば安治船をやらはせ九日卯の
刻に西宮浦といふ所に着て
惣次第に河波守家政とに分て蒲山
をいそぎ行
同三年正月二日小蒲山に着行
四日に未の刻の合戦と城壁の攻撃
也せたる日に漢南に陣まと
敗軍しけるを二里ばかり追懸勝
討捕ぬ安治が家人には勝屋兵
福原半蔵と宅庵介首をとる日く
れてをの〳〵陣取へき旨日を
蒲山に追懸し六日まをく
南海乃城にかゝりをれやしの
去攻撃ことく〳〵陣し日なを
かゝりかゝて秀吉紀雑国立陣の
軍よを戦労を賞し爵禄をあつく
しこまふ安治に感状をこまふ

お今度朝鮮表書船切れる別
物骨ゝ宿神妙ゝ思召仰付
前代官所ゝ同じゝ之事
今扶助筑金二俵知ト

寛七之
六月廿二日　秀吉朱印
脇坂中務少輔ゝ
同五年乃秋逆臣五田治部少輔之成
張係をくゝて

東照大權現ゝそむきそてまつり
濃州山中関原ゝ出張してふせぎ
たゝかひつゝんとして
大檜原ゝ於て乱賊を追伐し四海を平
治しゝ海内とて関東ゝ引馬を
ひるゝとまふとさこうえんそれば安治ゝ
鬼男溪海守安元を関東ゝ差そひ
ゝに上方志さりゝ小弱動して遂次
乃つまひとゝ海内ゝ帰れば関東

使者を差上候それを江州より大坂よ
かへりぬ
大権現安元へ御書をくだしたまふ
山岡道阿弥へ之手紙披見候然者
之趣承候就上方忩劇浅野
以之外候御父子令忠節候
堅固ニ手堅要ニ及迄日今上
修之条被感し居城
織部佑可申候恐々謹言

八月朔日　家康御判
脇坂淡路守殿
大権現まで小関東より御発向したまひ
濃州赤坂より御陣をうつしたまふ
脇坂父子も大坂より濃州山中にきたり
ひそかに九月十五日辰の刻に一戦よ
筑前中納言豊臣秀秋と安治おし
しく息男安元の称てよりもの内意
なれば御味方とられるそれのちに成

敗軍を
大權現伊吹山に楯小山に陣を
うつしまゐらせき脇坂又右衛門
けをば
大權現我ゆを労しくまゐらせく名誉
始終まゐらせらつかく
大權現乃幕下に属しまゐらせ海つる
かくて江州伊和山の城主成が兄
石田治部とひしまの橋龍ゐれば

拘を追伐をつかさる
くまゐる日牧原の宿り陣をかる
翌十六日に伊和山の城へそませ
けり十七日卯の刻より脇坂又右衛門の城
南大手に押入さびしくせめ
ら年の刻ら城しかる石田
治部少輔の泉沙又右衛門上野喜兵衛
子ホ十四人を捕にく城和泉ちを
刎て
上野小達しなれば

大樹現いよ〳〵怒ましまくかくて
伯耆和山し為城〳〵石田が徒黨悉打
ちこしこまひて後大坂へ〳〵せ
給ひ安治ゟ西国船ハ渡海ゟ
入のたさへ川口を警固べき
ものとて伯耆守ハ被仰付
同十四年九月ハ渡海国ゟ伊与国
へ引ハ被仰付
にて五万石を領ス

元和元年豫州ハ領地を悪男渡海守
安元ゟ少ゝ同三年海陽へ移
て西洞院へ移ル
寛永三年八月ゟ病ハ
卒ス年七十三妙仏寺ニ葬ル
ハ号ス

安景
外記

元和元年六月大坂兵乱のとき伊達
陸奥守政宗ハ屬し大坂道明石に
いたり首二級を得て戦死ス

女子
渡邊七右衛門が妻

女子
作野勘七が妻

安忠

甚内　早世

安元

甚太郎　渓路守ニ任ス
慶長六年　正月
大樹様の命をうけ諸侯に従ス位下
叙し侯爵家ニ任ス
同六年安元ハ江戸ニ来リ
右徳院殿ニつかへたてまつり
同十六年安元が妻を縁列ニ

江戸へうつる

同十九年大坂の御陣のとき

右徳院殿乃御命をうけ先鋒奮戦

和泉守忠直虎と化し敵を

ひしひしゆさてせめかかる

元和元年大坂再乱のとき

右徳院殿の麾下に属し

ひろう山大炊助利勝と天王寺表

向てせめかかる

同三年

右徳院殿乃御命をうけ西国伊豫国

より信濃国伊奈郡上総一家めく

五万石の家地を給

寛永十三年 癸十二月六日 朝鮮国

乃信使任絖金世濂英庶弟武列

江戸へ来貢し旅館於本願寺

あるときに安元

将軍家乃右命をかうむり安房太京進と

たゞ〻く知恵人と成り事を
ほこさどう同腹自然難の信使江戸を
うちてかへり

安信

甚九郎
浪人信下小叙し自水西下任ぜ
病死し

安英
甚九郎
安正
山之郎
安長
久之郎
女子
池田之助の妻

安重
右馬助

安之
右門

安忠
三十郎

女子
服切弥兵衛が妻

女子

安経
虎松
後五位下有叙し仏海寺住

安元が養子となる早世

安方
白馬助

国立公文書館
National Archives of Japan

安俊
　訥こ助
安次
　虎こ助
安通
　面こ助
女子
女子

安成
　甚蔵　蔵人　病死
元清
　沙門となる　妙心寺　除蕪庵了徳
女子
　清水谷宰相の妻
女子
　腸炎牛こ助の妻
女子

脇坂伊織が妻

女子

田中源太郎が妻

女子

脇坂宗兵衛が妻

女子

脇坂五郎助が妻

女子

庵光寺沢郎八が妻

安利

左兵衛

堀田かつ笑当正盛が歩なり

将軍家光鈞命をうけて安元が養子

病死

安吉

長太郎

堀田かつ笑当が二男なり

寛永十七年八月十五日
将軍家乃勅命をもつて安元が表
ゆゝ九月十二日乃雅楽さゝら
家の紋初め桔梗揚羽小あゝこゝ
小南それとも三ゝ引ゝさゝ
ゆゝらぐらの丈乃藤原

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan